

うきたむ

第13号

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

山形県東置賜郡高島町大字安久津2117 TEL (0238-52-2585)

FAX (0238-52-4665)

1999.5.20



風土記の丘と歴史公園

本館運営協議会

委員長 浜田清明

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館とまほろば古の里歴史公園という呼称の違いはどうしてなのか、たまたま聞かれることである。

風土記の丘の建設に当たっては、西都原(宮崎県)を始め、さきたま(埼玉県)吉備路(岡山県)の各風土記の丘のように都市計画公園、県立自然公園の手法を導入して整備されたものがある。うきたむ風土記の丘の場合には「丘」の中心的施設である考古資料館は県が高島町の協力を得て建設し、「丘」の顔としての歴史公園は高島町によって都市計画公園として整備する方法がとられた。このことは、平成五年三月発行の「考古資料館要覧」に、「風土記の丘《歴史公園》は高島町が考古資料館及び安久津八幡神社の周辺を中心に整備が進められている」と記述されていることから明らかである。

即ち歴史公園は、風土記の丘としての顔と公園としての顔の二面性を持つと考えられる。

風土記の丘の立地については「古墳などの遺跡等を包含し、できるだけ自然環境を保った地域」という原則があるが、平成十年四月二十九日開園した、まほろば古の里歴史公園は敷地面積八万三千㎡を有し安久津一号・二号古墳、復元住居、体験施設、万葉の花園等立地条件を満たす極めて恵まれた地域にある。

この歴史公園が考古資料館と共に、県民に活用され親しまれ心の安らぎを得られる存在となることを願うものである。

古代と現代をむすぶ

多彩で豊かな語らいの場を



▲展示予定の山形市菅沢2号墳の埴輪
(山形市教育委員会保管)

山形の古墳、日本のなかの五回にわたる開かれることになった。九月二十六日までの日曜日の五回にわたる開かれることになった。日本のなかの山形の古墳、



毎年好評で、自作の縄文土器に花を生けたり、土偶を玄関や部屋に飾っている方もいるとか。たのしい雰囲気なかで、語りながら縄文生活にふれ、縄文から現代への創造への足がかりをえることができる。

歴史公園の整備と相まって、昨年の入館者は、一万人をはるかに越えた。今年度の行事も、豊かで楽しいプランを準備し、多くの方々の来館を期待している。学習と体験とそして遊びの場として、ここで二十一世紀に生きる方向を探ることも無駄ではないだろう。開館七年目の今年の主な催しを紹介しよう。

企画展は「山形の古墳とその時代」

古墳は、日本の国が誕生するころの巨大なモニュメントである。しかも山形は、古墳時代における古墳の分布の北限の地でもある。四世紀にすでに畿内を中心としたヤマト連合国家の影響が及んだといわれている。

セミナーやシンポジウムも

いままで五年間にわたり開いてきた「考古学入門」講座が「考古学セミナー」として再発足する。

今年企画展にちなんで、古墳時代を中心とした講座が八月二十二日

をかわきりに、九月二十六日までの日曜日の五回にわたる開かれることになった。

東北のはにわ、古墳時代の集落跡、古墳の副葬品などについて、それぞれ第一線で活躍している研究者を講師にお願いしている。

六月六日に土器づくり、六月十三日に土偶づくり、八月八日と十一月四日に石器づくり、火おこし、やり投げ、編布づくり、勾玉づくりなどの体験学習が行われる。

県内の数少ない「はにわ」をできるだけ網羅する予定である。開展は十月一日から十一月三十日までの2ヶ月間。はにわの他に、古墳に副葬された武器や農具・装身具などもまじえ、葬られた人々の姿に迫りたい。

また古墳をつくらされた農民のくらしをうかがうために、四七世紀までの土器や生活用具なども展示し、古代のくらしを生き生きと再現したい。

みる・きく・ふれる

遺跡の旅

春の遺跡巡りは、定員をはるかに超える多数の参加で、白鷹・長井方面をまわった。

恒例のバス一台による遺跡の旅は、六月二十六日・二十七日、栃木県のものつけ風土記の丘やなす風土記の丘を中心に、古墳や寺院跡・国庁跡などをみる。一泊の予定で、今参加者を募集中。

縄文まつりも盛大に

九月五日にうきたむ縄文まつりが開かれることになった。午後から縄文時代の生活を体験した後、夕暮れ迫るころ縄文太鼓の演奏をききながら、縄文食を試食する。かがり火を囲んで、縄文のロマンを語り合い、縄文のリズムに合わせて、とりどりの個性的な踊りを楽しむ。仙台から縄文舞踊団も来るとか。

たのしい

体験教室

雨の桜街道をゆく 春の遺跡めぐり

春の遺跡めぐりは、去る四月二十五日(日)白鷹・長井方面へ予定通り行われた。スタッフも入れて総勢三十五名、マイクロバスに加えて、ワゴン車に分乗して九時出発。

釜の越のエドヒガンザクラの大木は満開で、そこで白鷹町教委の原敬一係長の説明を聞く。



▲長井市土偶の丘で

その後はふる里森林公園に車を止めて、雨のなか笠松山山頂まで登る。ここは景勝の地で、平安時代後期の経塚が発掘された場所である。ガラス越しに遺構の様子を観察でき、石製の経筒のレプリカ二個を現地で見ることが出来るのはありがたい。次は十王の称名

桜をめぐる伝説に耳を傾け、また地区婦人会の心尽くしのコゴミやアイコなど山菜のおひたしに舌つづみをうつ。

次の見学地は、深山観音堂。このあたりから雨足がはげしくなる。緑の木立のなか、平安時代の様式阿弥陀堂建築のなごりをとどめる観音堂を拝む。室町

寺、かくれ切支丹の文書や遺物があわれをさそう。

原氏と別れて、西山ぞいに長井市古代の丘に向かう。資料館では市教委の岩崎義信氏の懇切な説明を受ける。その間、交代で資料館前にある「縄文そば」を賞味する。その後、長者屋敷で最近発見された巨大木柱群についての話をきき、ストーンサークルや「土偶の丘」をまわって、古代の丘を後にする。

最後に伊佐沢の国指定天然記念物「久保の桜」を見る。雨に煙る桜の老木の風情もひとしお。

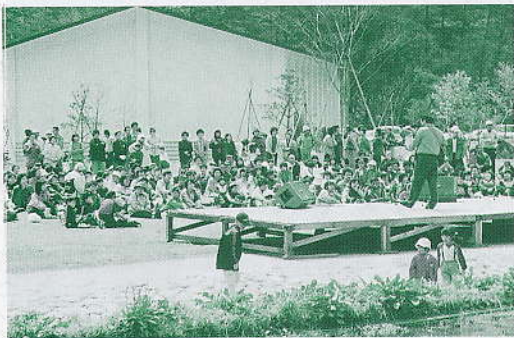
千年も前から春になると咲き誇り、人々を見つめつづけて、いま痛々しいほど老樹となった桜を一巡して帰路につく。「ねがわくば花の下にて春死なむ…」の西行の歌が頭をよぎる。

四時前全員無事に帰還した。

春の華やぎ

—歴史公園で春まつり—

去る四月二十九日(緑の日)に歴史公園を会場に恒例となった春まつりが行われた。約一〇



▲須貝智郎の野外コンサート

〇〇人を越える人々にぎわいをみせた。

歴史公園管理組合や商店会などの屋台が並び、黒米のおこわが無料で配られ、三〇〇食用意したものがまたたくまに底をついた。

茶の湯のグループによる野だて、山菜売り場なども設けられ、午後からは野外で須貝智郎のコンサートなども開催された。

やや風が強くと、屋外は春にしては寒かったが、公園の菜の花畑が彩りを添え、終日人の波でにぎわった。当日のわが館への入館者は一五〇名であった。

わが館の新スタッフ

人事異動で開館当初からおられた鈴木栄一主事が他の部署へ動かれ、新たに次の方々が館の運営にあたられることになった。

●館長代理 今井四郎右エ門
●主事 大河原恵美子
●臨時職員 日詰 由美

川崎館長、島津主事、宇佐美学芸員と今年は六名のスタッフである。



▲火箱岩にて

白鷹町

笠松山経塚

白鷹町荒砥の東にそびえる笠松山は、標高354メートル。

その山頂に経塚遺跡があり、白鷹町の教育委員会によって整備されている。遺跡のようすがわかるように、ガラスケースで経筒が出土した塚の内部を見ることのできる。また近くには出土した石製経筒のレプリカが現場に陳列されている。

この経塚が発見されたのは、一九八五年（昭和六〇年）で、保養センターの給水源としてのタンク地として壊される寸前に地元の研究者の努力によって発掘調査が行われた。

頂上部には2つの塚が尾根上に並んでいた。一号塚は長径一九・三メートル、短径一七メートルほどの楕円形の塚で、これには長さ四メートルほどの方形の張り出しがつき、まわりには浅い溝がめぐっていた。二号塚はこれよりもやや小さく、方形の

塚に帆立貝のように方形の檀が付いていた。

はじめに経筒が発見されたのは二号塚で、地下一二〇センチ下から川原石に囲まれて見事な石製の筒が発見された。それは高さ四一センチ、径二三センチ凝灰岩の石を円筒形にきれいに磨きあげ、蓋は山形のつまみをつけてかぶせてあった。

二号塚も中央部を掘りさげたところ礫石でつくられた小さな石室があり、木炭がぎっしりつまった中からやはり石製円筒形の容器があらわれ、蓋をはずす

と、中から高さ二十五センチの銅製の経塚が発見された。これには金メッキが施されていたらしく、ところどころ光を放つ。経巻の軸木もあったが、納めたはずのお経は炭化していた。

経塚のはじまりは、末法の世にあたり、五十六億七千万年の弥勒の出現まで、経巻を保存しておこうとの考えから起こったという。だから嚴重に密封して地下深く埋納したのである。

そうすることが人びとに幸せをもたらし、極楽往生をとげることもできると信じられていた。つまり今のタイムカプセルと似ている。

これと似た経塚は、近くでは十王地区の称名寺の裏山でも一九八九年に発掘されている。時

期は十二世紀の末頃とみられるが、ここに立つとき戦乱に明けくれたその当時の人々の熱い思いがよみがえってくるようである。

銅製の経筒は、いま白鷹町中央公民館に展示されているが、経塚をりっぱに発掘して当時さながらに保存している例は、県内でここが唯一である。

わが館の展示品(4)

台の上の

縄文土器

常設展示室でひとときわ目につくのは、押出遺跡関係のレプリカや遺物とともに、米沢市台の上遺跡の縄文中期の雄大豪壮な大型土器である。

いま展示しているのは、胴張りの甕、深鉢型の大型土器、浅鉢型土器の三点である。

胴の張った深鉢（甕）は、高さ五十五センチ、口径四十七センチで、隆起文による渦巻きが全面にめぐり、口縁には渦巻きモチーフとした透かし彫りの把手が六カ所にめぐる。体部の地紋は斜行縄文。

背の高い深鉢は、高さ七十二センチ、口径五十七センチ。口



縁部が発達し、渦巻き透かしによる装飾把手が大きなもの四ヶ所、その間に小さなもの四ヶ所めぐる。体部の隆起渦巻きはやや退化している。地文は斜行縄文。浅鉢は上からの形が方形で、高さ十三センチ、口径三十七センチ。

台の上遺跡は、米沢市の南部、松川の西側段丘にある広大な縄文中期の集落遺跡である。最近では一九九五、九六年に米沢市教委により緊急発掘が行われ、五八棟の堅穴住居跡をはじめ、おびただしい遺物が発掘された。いまは宅地化がすすみ、急速に遺跡は消滅しつつある。

展示の土器は、縄文中期のごろ大木8a、8b式の土器である。